

音読してみる平安文学のカタチ

加藤 浩司

はじめに

以下は2020年9月25日(金)14時から15時30分まで行なわれた同年度の山梨県立文学館年間文学講座1「古典文学入門」の第2回において同題で講演した際の概要をまとめたものである。ただし当日説明が不十分だったと思われる点について補筆した。

1 玉上琢也氏の「物語音読論」

玉上琢也氏は「物語音読論序説」(『国語国文』19-3、1950年12月)において、「源氏物語絵巻東屋巻一」(宇治の中君が女房に物語を読ませ、浮舟が絵を見る図)などを根拠として、「源氏物語(以下「源氏」と略称)」など平安時代の物語は自分で黙読するのではなく他人の音読を聴く形で享受されていたと主張し、当時多くの賛同者を得た。その5年後、同氏は「源氏物語の読者—物語音読論—」(『女子大文学』7、1955年3月)において「源氏」の「草紙地」を分析し、「源氏」には「語り伝える古御達」、「筆記・編集者」、「読み聞かせる女房」という三種の「作者」が存在すること、また、当時の読者には「女房に読ませて聞く」「上の品の姫君」と、「女房階級」および「几帳のかげに一人テキストを広げて耽読する中の品」という二種の読者がいて、後者ではなく前者が「源氏」など当時の物語の「真の読者」として想定された読者であると主張した。これらの主張についてはその後賛否両論が示された。

玉上氏の「物語音読論」は、当初、平安時代の物語は黙読ではなく他人に音読されるものだった、言い換えれば、目で読むものではなく耳で聴くものだったという主張だったはずであるが、その後「草紙地」分析によるテキスト内部における「作者」の階層性ないし語り手論や、「真の読者」は誰かという享受者論へとずれていってしまった感がある。音読する行為、目で読むのではなく耳で聴くという行為そのものの有する問題を、具体的かつリアルに検討する方向にはあまり進んで行かなかった。

2 当時のテキストはどんなものか、すらすら読めるものか

耳から聴いただけでその物語をきちんと理解するためには、少なくとも本文が正しく理解できるように正確に、詳しく言えば適切に句読され、地の文と会話文も適切に区別

できるようにされて、読み上げられなくてはならないだろう。現代の古典注釈書は句読点や引用符、漢字仮名混じり文に書き変えられることによる語頭の多くの漢字始まりという目印などによって随分読みやすくなっているためほとんど意識されないが、これらの加工が施されていない変体仮名のベタ書きテキストがいかに読みにくく、切れ目の分かりにくいものであるかは、変体仮名の読み書きを教わった旧国文科出身の者なら皆体験済みであろう(以上 9 行分補筆)。

平安末期から鎌倉初期にかけ、藤原定家が数多くの歌集・物語・日記などの平安仮名文学作品を校訂した。現代の我々が読む古典注釈書の多くは定家の校訂本を底本(=依拠する本文)としている。「源氏」の青表紙本や「伊勢物語」の天福本など。ある程度漢字も混じり、墨継ぎや連綿、変体仮名の工夫などで単語の切れ目が分かりやすくなっているという(小松英雄『日本語書記史原論補訂版』笠間書院 2000 年)。

ところが鎌倉時代以前の定家の手を経ないテキストである「橋本本」の「源氏」「若紫」巻冒頭を見る(伊藤鉄也・浅川槿子編『国文学研究資料館蔵 橋本本『源氏物語』『若紫』』新典社 2016 年参照)と、漢字表記は「給」「侍」など敬語関係や「人」「山」などの簡単なものに限られ、墨の濃淡も一様で単語の切れ目がすぐに分かるようには書かれていない。平安時代以前のテキストはむしろこのような、意味の切れ目が必ずしもはっきりとは示されていないものだった可能性の方が高いと思われる。いくら変体仮名が常用の文字だったとはいえ、当時の女房達はこれをすらすら音読できたのだろうか。

ほとんど変体仮名で書かれた物語を初めて目にした「読み聞かせる女房」はおそらくうまく音読することができなかつたのではないか。特に「源氏」のように複雑で長く続くような文を数多く有する作品は。もし、当時の仮名ベタ書きテキストを適切な意味の切れ目で正しく切って読み聞かせられる読み手がいたとしたら、それは誰よりもまず作者本人であるか、作者から読み方つまり適切な切り方を教わることでできた者であろうと思われる。

3 物語制作の動機と享受について

最近横井孝氏は「物語の本義(二)」(『実践国文学』96、2019年10月)において、「蜻蛉日記」や「源氏」を例に、日記や物語が現代の文学作品の多くのように「不特定多数のために」ではなく「特定少数のために」書かれるものであることを、作品本文の表現や「源氏」制作の伝説・伝承、当時の料紙の貴重さなどから推定・主張した。合わせて「源氏」が中宮彰子のために書かれ献上されたとする説も紹介しており、頷かされる。

もし「源氏」が途中からであれ彰子のために書かれたのだとしたら、作者紫式部自身が彰子(他に傍仕えの女房達もいたかもしれないが)という特定読者に自ら音読したのではないか。新たに創作されて初めて目にする「源氏」本文を正しく音読できるものは作

者紫式部自身をおいて他にいるはずがない。テキストの書写とともにその読み方が他の女房達にも学ばれ、あるいは真似され、流布していったのではないか。

上代の職業的な「語り部」、中世の琵琶法師(「平曲」)や「太平記読み」、さらには説経節や幸若舞など、職業的な語り手の系譜が一筋のように続いていたとしたら、平安中古の語り手の系譜にもこうした「物語読み」の女房達が、資料には残らないが、実は隠れていたのではないかと思われる。なおそれらしき数少ない事例について、時代は下るが既に玉上氏(前掲「物語音読論序説」)が「才学をたてて読む」女房(「源中最秘抄」)や阿仏尼(飛鳥井雅有「嵯峨の通ひ路」)の例を、増田繁夫氏(「源氏物語の語り手と音読論」同氏他編『源氏物語研究集成第四巻 源氏物語の表現と文体下』風間書房 1999年所収)が「物読」の女房(「乳母草子」)の例を指摘している(以上9行分補筆)。

そして同様のことを他の物語や日記などについても想定すべきではないか、と思うのである。

4 私の文体史研究との関連

私はかつて「物語の叙述態度—文末詞調査の試み—」(『名古屋大学人文科学研究』19、1990年3月)で平安文学16作品の地の文の文末詞(文末述部の最後に使用されている語の品詞)を調査し、その結果から各作品を伝承型(「伊勢物語」などの歌物語)、戯曲型(「竹取物語」「うつほ物語」など)、体験談型(日記類と「源氏」以降の作り物語類)の三種類に分類した。なおこの論文は「うつほ物語論」という卒業論文を約5年かけて発展させたもので思い入れがある。

この三種は歴史的には伝承型→戯曲型→体験談型という順序で展開している。「竹取物語」や「落窪物語」は戯曲型でも面白く、短編ないし中編としてそれぞれ成功している。ただし「うつほ物語」は冗長な表現、例えば延々と状況描写を続けたり、登場人物の歌を羅列したり、登場人物間の対話場面が頻繁に繰り返されたりし、あまり成功しているとは評されない。こうした傾向は特に前半の巻々に現われ、後半になるとそれほど目立たなくなる。

しかしながら、横田氏の主張するように、当時の物語が特定読者の要請により執筆されたのだとしたら、面白くない物語の続編など誰も望まないだろうから、続きが書かれるには至らないはずである。しかるに「うつほ物語」は巻を重ねて全20巻、「源氏」の5分の3程の長編物語となっている。いったいどうして続編が望まれ、書かれたのか。「うつほ物語」前半の巻々にも実は当時の享受者達にとっては「面白い」「続きが読みたい」と思わせるところが数多くあったのではないか。それではその「面白さ」はどこにあったのだろうか。少なくとも現代の注釈書で黙読する限り「うつほ物語」はそれほど面白くないのであるから、残りの可能性は音読という当時の享受形態にある可能性が

高いと思われるのである。

5 平仮名ベタ打ちテキストを作成してわかったこと

音読された場合、耳で聴く情報だけから内容を理解するのであるが、その情報は現行の古典注釈書の本文からは想像しにくい。耳で聴く音だけ、というのであれば、それに一番近い表記形態は、当時のテキストがその通りであったように、全文を一字一音式の平仮名(平安時代の作品であればまだこれに外れる発音の漢語等も限定されており、それほど問題はないだろう)だけで表記したものだだろう。ただし、音読された場合、地の文と登場人物の会話部分とはそれと分かるように異なった読み方がなされた可能性が高いであろうし、和歌もそれと分かるように歌として詠ぜられたと思われる。心中の言葉や、消息(手紙)の部分もこれに準ずるであろう。また、句読点に当たる「間」も、音読の場合は適切に取られたものと思われる(以上10行分補筆しつつ6節冒頭から位置を改めてここに移動させた)。

「うつほ物語」は長編であるため、上記三種の中でそれぞれ比較的短い「伊勢物語」、「竹取物語」、「土左日記」を対象として、「全文平仮名ベタ打ちテキスト」を作成し、かつ「地の文」、「和歌等」(歌謡等を含む)、「会話」、「心話」、「消息」(手紙)、を色分けして区別してみた。そしてそれぞれの文字数と比率を調べた。

作品名	伊勢物語	竹取物語	土左日記
地の文	16432(66.7%)	10238(50.0%)	9707(76.1%)
和歌等	6556(26.6%)	467(2.3%)	2047(16.0%)
会話	1015(4.1%)	8656(42.3%)	904(7.1%)
心話	454(1.8%)	316(1.5%)	101(0.8%)
消息	175(0.7%)	498(3.9%)	0(0.0%)
計	24632(99.9%)	20475(100.0%)	12759(100.0%)

いずれも「地の文」が中心だが、やはり「伊勢物語」では「和歌等」の、「竹取物語」では「会話」の比率が高い。「土左日記」は「地の文」が多いが、「伊勢物語」では「和歌」そのものが、「竹取物語」では「会話」のやり取りそのものが面白くないと、これらの面白さは半減してしまうはずだと思われる。

6 妄想して音読してみる平安文学のカタチ

以下はまだ、そしておそらく将来も実証できない私の想定する平安文学の音読のカタ

チである。

なお本稿では、音読を文字化するに際し、「平仮名ベタ打ちテキスト」を元に句読点を追加して音読の際の「間」を示す。ただし一人の人物の会話中には句点は使用しないこととする。また強く読む部分を太字で示す。主に係助詞や疑問詞などである。

最初の「竹取物語」では会話部分を落語のやり取りのように登場人物になり切って音読してみる。目標は落語の名人、三遊亭円朝か円生であろうか。

①竹取物語「貴公子たちの求婚」冒頭(阪倉篤義氏校注岩波旧古典文学大系本の本文による)

これを見つけて、おきな、かぐやひめにいふやう、(次からの____部分は老人らしく低い声で読む。以下「竹取の翁」の会話部分については同じ)わがこのほとけ、へんげのひととまうしながら、ここらおほきさまでやしなひたてまつるころざし、をろかならず、おきなのまうさんことはききたまひてむや、といへば、かぐやひめ、(次からの部分は女性の声らしく高い声で読む。以下「かぐや姫」の会話部分については同じ)なにごとをか、のたまはんことはうけたまはざらむ、へんげのものにてはべりけんみともしらず、おやとこそおもひたてまつれ、といふ。おきな、うれしくものたまふものかな、といふ。おきな、とし、しちじふにあまりぬ、けふともあすともしらず、このよのひとは、おとこはをんなにあふことをす、をんなはをとこにあふことをす、そののちなむ、かどひろくもなりはべる、いかでかさることなくてはおはせん。かぐやひめのいはく、なむでうさることかしはべらん、といへば、へんげのひとといふとも、をんなのみもちたまへり、おきなのあらむかぎりは、かうてもいますかりなむかし、このひとびとの、としつきをへて、かうのみいましつつのたまふことを、おもひさだめて、ひとりひとりにあひたてまつりたまひね、といへば、かぐやひめのいはく、よくもあらぬかたちを、ふかきころもしらで、あだごころつきなば、のち、くやしきこともあるべきを、とおもふばかりなり、よのかしこきひとなりとも、ふかきころざしをしらではあひがたしとおもふ、といふ。おきないはく、おもひのごとくものたまふものかな、そもそも、いかやうなるころざしあらんひとにか、あはむとおぼす、かばかりころざしおろかならぬひとびとにこそあめれ。かぐやひめのいはく、なにばかりのふかきをか、みんなといはむ、いささかのことなり、ひとのころざしひとしかんなり、いかでかなかにおとりまきりはしらむ、ごにんのなかに、ゆかしきものみせたまへらん、みこころざしまきりたりとて、つかうまつらん、と、そのおはすらんひとびとにまうしたまへ、といふ。よきことなり、とうけつ。(聴衆より拍手)

「竹取の翁」と「かぐや姫」のやり取りがかなり長く続く部分である。会話主の転換が地の文に示されない所(「といへば、へんげのひと」など)もあり、それぞれの会話部

分が「声色」などによって読み分けられないと耳から聴いているだけでは戸惑う可能性もあり、このような音読方法を想定した。何よりもこのように音読してこそ、聴いている方は、このような対話のやり取りを、より面白く鑑賞できるだろうと思うからである。

②伊勢物語第一段（大津有一氏・築島裕氏校注岩波旧日本古典文学大系本の本文による）

むかし、おとこ、うみかうぶりして、ならのきやう、かすがのさとに、しるよししてかりにいにけり。そのさとに、いとなまめいたるをんなはらからすみけり。このおとこかいまみてけり。おもほえず、ふるさとに、いとはしたなくてありければ、ここちまどひにけり。おとこのきたりける、かりぎぬのすそをきりて、うたをかきてやる。そのおとこ、しのぶずりのかりぎぬをなむ、きたりける

かすがのの一、わかむらさきの一、すりごろも一、わがむらさきの一
すりごろも一、しのぶのみだれ一、かぎりしられず一（線部分は和歌として詠じる。また「かすがのの一」などの長音符号は句末を伸ばして詠じていることを示す。以下同じ。）

となむ、をいつきていひやりける。ついでおもしろきことともやおもひけん、みちのくの一、しのぶもちずり一、たれゆへに一、みだれそめにし一、
われならなくに一

といふうたのこころばへなり。むかしびとは、かくいちはやきみやびをなむしける。

「わかむらさきのすりごろも」という部分を変えて二回詠んだ。この「わかむらさき」は「若紫の(未熟な紫草)」と「我が紫の(私の—紫草で染めた—摺り衣)」という二重の意味を掛けた掛詞だと考えられる。この「掛詞」について、当時、いくら和歌の教養がある人々が多かつたとはいえ、こうした「わかむらさきのすりごろも」という語連続を耳から聴いただけですぐに掛詞だと気づけたであろうか。私はこのような掛詞は上記のように読み方を変えて二回詠みあげれば、耳から聴くだけでも容易に掛詞だと誰でも理解できるため、音読論的享受形態において極めて有効性の高い方法ではなかったかと思う。

ついでに、物語で次第に多用されるようになる「引き歌」という技法についても私の推定を述べる。同様に、当時、和歌の教養がある人々が多かつたとはいえ、もし耳から聴くだけであつたら、ほんの一瞬のうちに読み上げられる引き歌、つまり地の文の中に引用された和歌の一部を、聴いてすぐにそれと気づけるであろうか。そこにはやはり耳で聴くだけの享受者のために、それと気づけるような読み上げ方の工夫がなされたのではないかと思う。

例えば「源氏物語」帚木巻の冒頭に葵上の実家である右大臣家の家人がなかなか通つてこない若い光源氏の浮気を疑う場面がある。

まだちうじやうなどにもものしたまひしときは、うちにのみさぶらひようしたまひて、おほいどのにはたえだえまかでたまふ。しのぶのみだれや、とうたがひきこゆることもありしかど、(以下略、山岸徳平氏校注岩波旧日本古典文学大系本の本文による、(二重)下線加藤)

この「しのぶのみだれや」という部分は、先の「伊勢物語」第一段の「しのぶのみだれかぎりしられず」という和歌を本歌とする引き歌だと諸注釈書にあるのだが、たとえ「伊勢」第一段の和歌とはいえ、通常の地の文、ないしは「心話」文として読み上げられたら、耳から聴いただけではそれが「引き歌」であるとは気づかないかもしれない。耳から聴いただけで確実に「引き歌」だと気づかせるには、やはりこの部分を「しのぶのみだれ一、やとうたがひきこゆることも」というように和歌として詠ずるのが最も容易な方法であろうと思う。

③土左日記一月十一日条(鈴木友太郎氏校注岩波旧日本古典文学大系本の本文による)

とをかあまりひとひ。あかつきにふねをいだして、むろつをおふ。ひとみなまだねたれば、うみのありやうもみえず。ただつきをみてぞ、にしひんがしをばしりける。かかるあひだに、みな、よあけて、てあらひ、れいのことどもして、ひるになりぬ。いまし、はねといふところにきぬ。わかきわらは、このところのなをききて、はねといふところは、とりのはねのやうにやある(この____部分、幼児のようにやや高い声で読む)、といふ。まだをさなきわらはのことなれば、ひとびとわらふときに、ありけるをんなわらはなん、このうたをよめる、

まことにて一、なにきくところ一、はねならば一、とぶがごとくに一、みやこへもがな一

とぞいへる。をとこもをんなも、いかで、とくきやうへもがな(この____部分、心中の言葉として感情を入れて読む)、とおもふころあれば、このうた、よしとにはあらねど、げに(同前)、とおもひて、ひとびとわすれず。この、はねといふところとふわらはのついでにぞ、またむかしへびとおもひいでて、いづれのとにかわする、けふはましてははのかなしがらるることは(この.....部分、地の文だが感情をこめて読む)、くだりしときのひとのかずたらねば、ふるうたに、かずはたらでぞ一、かへるべらなる一、といふことを、おもひいでて、ひとのよめる、

よのなかに一、おもひやれども一、こをこふる一、おもひにまさる一、おもひなきかな一

といひつつなん。

「土左日記」は平安仮名日記文学の嚆矢であるが、音読してみると現代の我々がつける日記とは実は異なっていることがわかる。我々の日記は例えば「何月何日、何曜日。

晴れ。朝、何々を食べる。何時に誰々と会う」などと、単に記録としてその日の出来事をメモするだけであり、自分だけの心覚えとして書くもの、であろう。他人に読み聞かせるものとは想定されていないのが普通である。

ところが「土左日記」では、そのような淡々とした記録的な部分もあるが、そうでない部分が数多くある。典型的なものは係り結びであろう。「ただつきをみてぞ、にしひんがしをばしりける」の「ぞ」は、誰に対して強調しているのだろう。自分で体験したことを、自分自身に強調してどうするのだろうか。ここからは明らかに誰か他人の読者(聴き手)に対して強調して語ろうとする意識が感じられる。

また、地の文から自然に心境の吐露に移り変わる、「この、はねといふところとふわらはのついでにぞ、またむかしへびとをおもひいでて、いづれのときにかわする、けふはましてははのかなしがらるることは」という部分。書き手が語り手として、我が体験を物語りつつ、その時の心境を生々しく想起した結果、当時の心境をそのまま吐き出してしまったという印象である。こうした地の文から心情吐露への自然な移行は、「日記」など先の「体験談型」に分類される平安文学の地の文にしばしば見られるものであるが、地の文と会話文、心話文が交錯し、それを語り分け演じ分ける音読の場面を想定すると、「体験者」=地の文の書き手である「体験談型」の作品にこのような現象が起こるのも、至極当然なことと思われるのである。(以上 10 行分補筆)

7 「うつほ物語」の面白さ

最後に少しだけ「うつほ物語」につき妄想したい。

④うつほ物語「藤原の君」巻三春高基挿話部分（野口元大氏校注明治書院校注古典叢書本の本文による）

ちひさくてやまひしてほとほとしかりけるに、おや、おほきなるぐわんどもをたてたりけり。なくなりけるときにいひおきけれど、かかるたからのわうにてはたさず。そのつみにおそろしきやまひつきて、ほとほとしくいますがり。いちめ、まつり、はらへ、せさせんとするときに、のたまふ。(以下___線部、老人らしく低い声で読む。以下同じ)
あたらしものを、わがためにちりばかりのわざすな、はらへすともうちまきによねいるべし、もみにてたねなさばおほくなるべし、ずほふせんにごこくいるべし、だんぬるにつちいるべし、つちさんずんのところよりおほくのものいでく、あふちのえだをひとつにみのなるかずあり、くだものにくふによきものなり、うごまはあぶらにしぼりてうるにおほくのぜにいでく、そのかす、みそしろへつかふによし、あは、むぎ、まめ、ささげ、かくのごときぎょうやくのものあり、とてせさせたまはず。

かくてふしたまへるほどに、まうぼるもの、ひにたちばなひとつ。ゆみづまうぼらず。

いたづらにおほくのたちばなくひつ、さねひとつにきひときなり、おひいでておほくの
みなるべし、いまはくはじ、とのたまふ。いささかなるものまうぼらで、ひごろへぬ。
ここにはあらで、たちばなひとつくはん、とのたまふ。さつきなかのをかごろのたち
ばな、これはなべてなし。このとののみそのにあり。みそかにいちめとりてまゐる。お
とど、こ、いちめのはらにいつづばかりにてあり。ははをゑじて、おとどにまうす。(以
下.....線部、幼児らしく少し舌足らずで読む)このたちばなをとりてなんまありつる、
とまうさん、といひつれば、あは、こめをつつみてなんくれたる、といふ。よはきみこ
こちに、むねつぶらはしきことをききたまひて、ものもおぼえたまはず。いちめ、(以下
線部、女性らしく高い声で読む)いとひとぎきかなし、このあこ、おのれとはらだちて、
せいしたまふこととてまうしたまふになん、といふ。ごふにやあらざりけむ、みやまひ
おこたりぬ。

「うつほ物語」の最初に書かれた巻と言われる「藤原の君」巻の、三奇人の一人「三
春高基」の桁外れの吝嗇の一例が描かれた部分である。「高基」とその妻「いちめ(市女)」、
二人の間に生まれた幼い子の三人が登場し主に会話によりその吝嗇さを描いている。こ
の部分など、三人の声色をあやつりつつ音読することによって、一種の落語を聴いてい
るかのような面白さが味わえるであろう(以下、「蜻蛉日記」冒頭部分、「源氏」「帚木」
巻の一節についても音読したが、本稿では省略)。

今回は採り上げられなかったが、「うつほ物語」の「冗長な状況描写」や「和歌群の
羅列」にも、音読される場合には、何か面白さや豊かさが感じられることがあったので
はないかと考えている。それらの検討は次の機会に譲りたい(以上4行分補筆)。

以上

(かとう こうじ、1994~1997年信州大学人文学部助手、現都留文科大学
文学部国文学科教授)